



東京大学最終講義  
**高等教育研究のパラダイム転換**

2010年3月20日 金子元久

# 高等教育の研究

---

## ▶ 高等教育

- ▶ 多様な事象、参加者、次元
- ▶ 三つの領域
  - ▶ 制度・組織 — 政策、財政、大学組織、ガバナンス
  - ▶ 内容 — カリキュラム、授業プラクティス、学生
  - ▶ 社会的機能 — 労働市場、教育機会、社会的公正

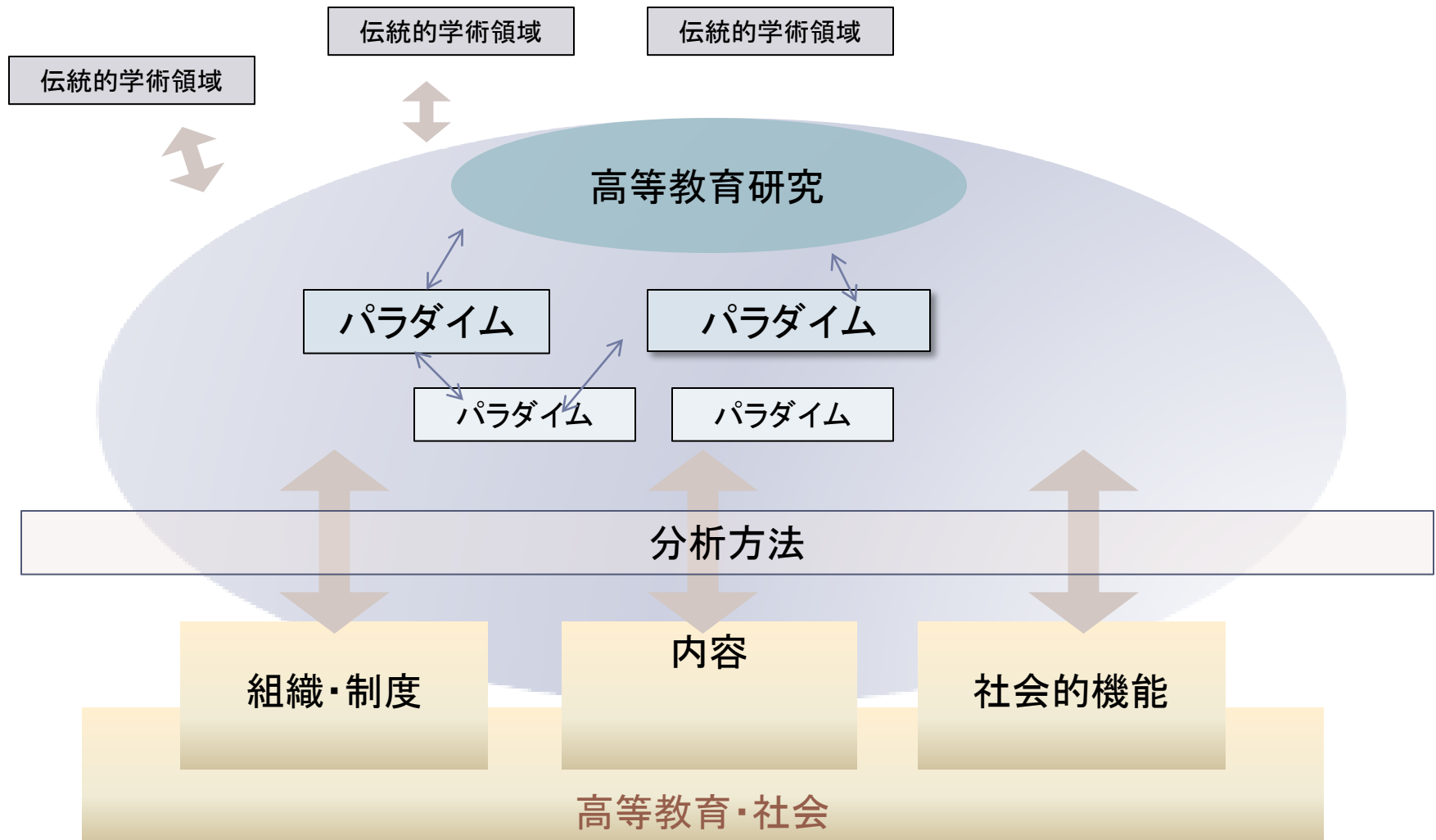
## ▶ 方法

- ▶ 歴史、比較、社会調査

## ▶ 生成途上の研究領域

- ▶ 独自の理論的体系はまだ生成途上
- ▶ 大小の研究パラダイムが併存

# 高等教育研究の構図



# パラダイムの役割

---

## ▶ 役割

- ▶ 高等教育の課題に対応した研究の中軸
- ▶ 実践との関係をつくる
- ▶ 長期的な理論・知見の蓄積

## ▶ 研究の進展

- ▶ 有効なパラダイムの意識的な構築
- ▶ いま必要なパラダイムは何か



## 内 容

---

- ▶ 1. 高等教育研究のパラダイム
- 2. 現代的課題
- 3. 新しいパラダイムへ

# 主要なパラダイム

	組織・制度	内容	社会的機能
戦後 制度構築	大学自治論	一般教育論	
1960 量的拡大			大衆化論
1990 再編	市場化・ 大学評価		

# 大学自治論

---

## ▶ 背景

- ▶ 戦後の新制大学 — 政府と大学との関係をめぐる議論
- ▶ 1960年代の大学紛争
- ▶ 大学自治の根拠を明らかにする必要

## ▶ 研究形態・方法

- ▶ 基本的には歴史
  - ▶ 皇至道、家永三郎、島田雄次郎、寺崎昌男
- ▶ 意義
  - ▶ 「大学」という制度の根幹を明らかにした

## ▶ 残された問題

- ▶ 歴史的事実は、現在の正当性の根拠とならない
- ▶ 大学自治はなぜ必要なのか、どう機能するのか

# 一般教育論

---

## ▶ 背景

- ▶ 戦後にアメリカから移入した「一般教育」
- ▶ 定着の困難さ 理念と実態とのかい離

## ▶ 研究形態・方法

- ▶ 制度論 — カリキュラム
- ▶ 実践研究
- ▶ 意義 — 大学教育の内容への関心を支えた

## ▶ 残された問題

- ▶ 制度と運動に分解
- ▶ 学生の学習という視点からの分析



# 大衆化論

---

## ▶ 背景

- ▶ 1960年代からの高等教育拡大
- ▶ 拡大をどのように位置付けるのか

## ▶ 研究形態・方法

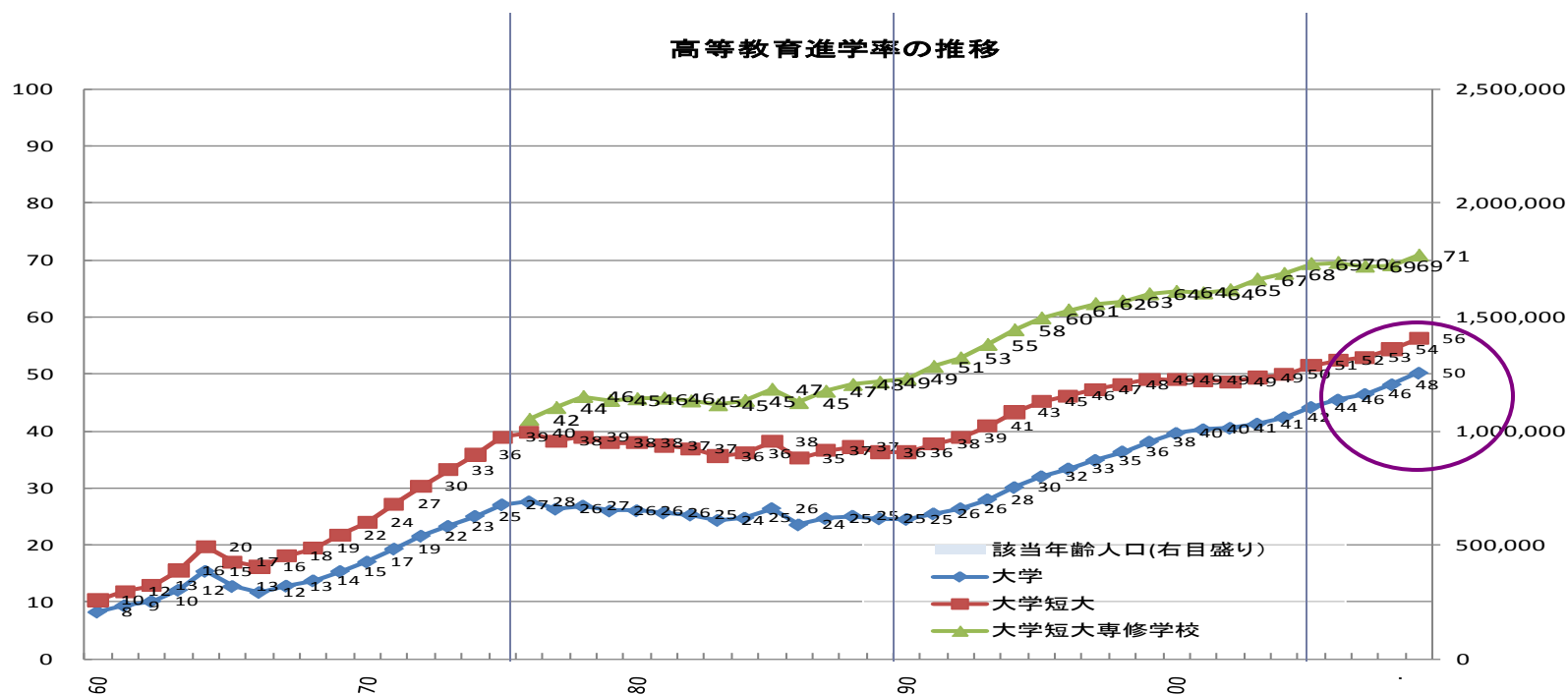
- ▶ 歴史・国際比較・計量分析
  - ▶ 天野郁夫、潮木守一、喜多村和之
- ▶ 実証研究を、高等教育政策批判、高等教育改革につなげた

## ▶ 理論的コア

- ▶ 発展段階論(M.トロウ)
  - ▶ エリート、マス、ユニバーサル
  - ▶ 高等教育は段階をおって発展する → 拡大の位置づけ
  - ▶ それぞれの段階で問題、課題がある → 高等教育改革論の根拠

## ▶ 残された課題

### ▶ ユニバーサル化以後に何が起きるか



大衆化

ユニバーサル化

# 市場化・大学評価論

---

## ▶ 背景

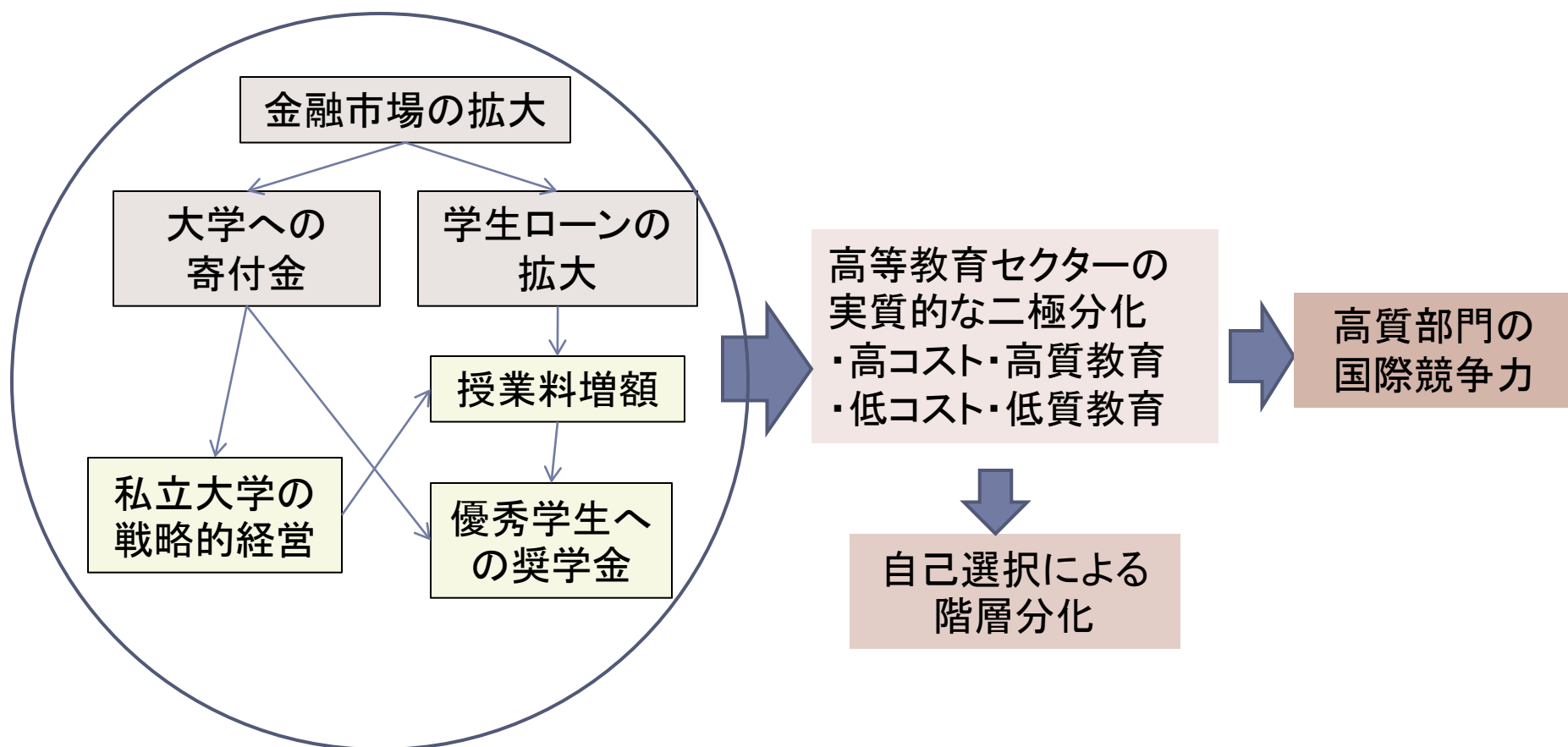
- ▶ 福祉国家政策の後退
- ▶ 小さな政府への政治的ドライブ
- ▶ 効率性・アカウンタビリティの強調

## ▶ 研究形態・方法

- ▶ 政治的なドライブに対する批判
  - ▶ 国立大学法人化をめぐる議論
- ▶ 問題意識はあるが、中核となる理論がない

▶ 残された課題

- ▶ 市場化・評価を構造的に理解する枠組みの構築
- ▶ 1980年代後半以降アメリカの高等教育





## 内 容

---

1. 高等教育研究のパラダイム

▶ 2. 現代的課題

3. 新しいパラダイムへ

# 1990年代以降の社会経済と高等教育

---

- ▶ グローバル化・知識社会化
- ▶ 高等教育のユニバーサル化
- ▶ 若者の価値意識・行動の変化

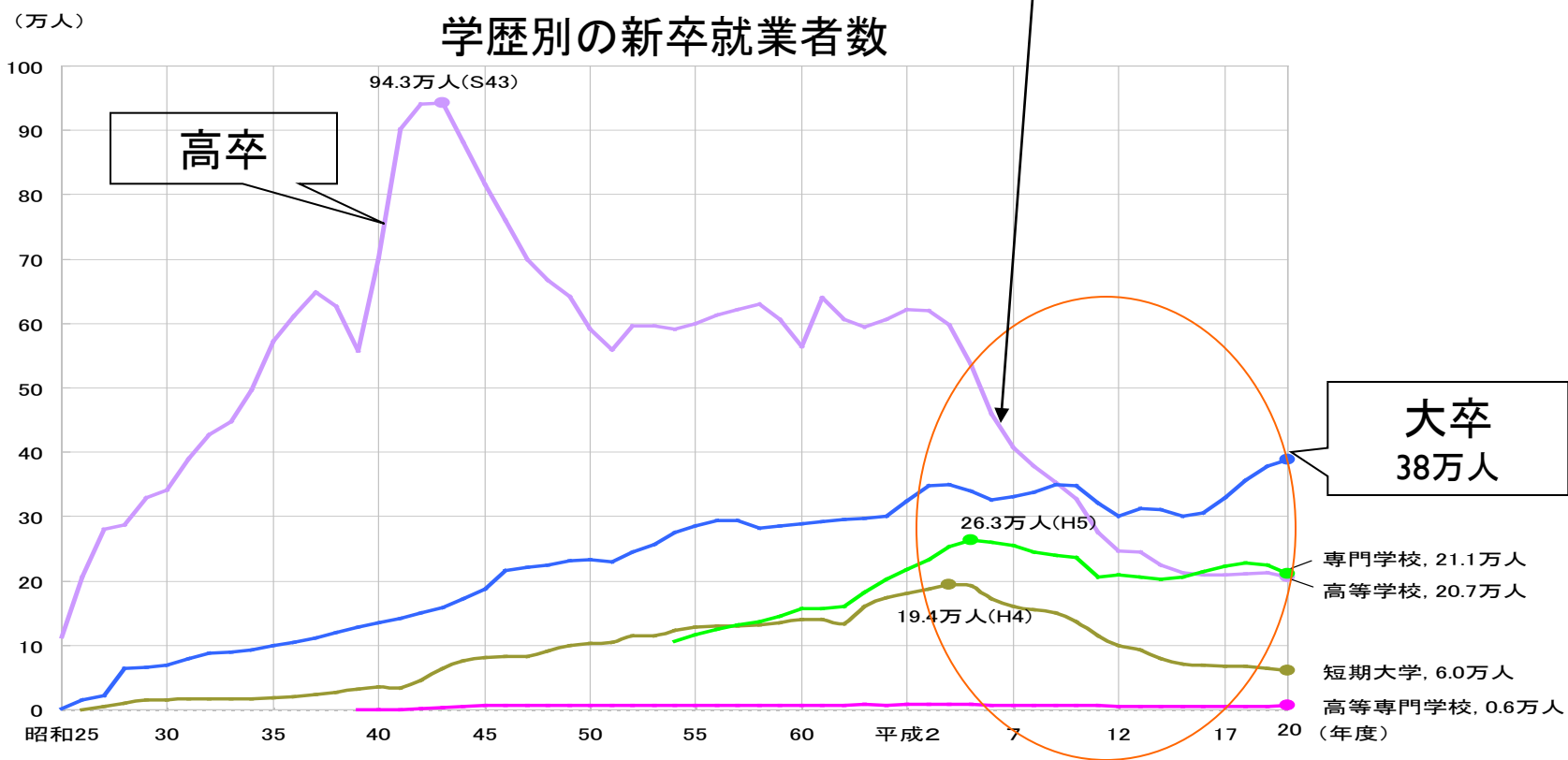
# グローバル化と大学教育

---

- ▶ 先端産業の競争力育成が課題
  - ▶ → 高度人材への需要
- ▶ 衰退産業・部門が生じる
  - ▶ 産業構造への影響
    - ▶ 製造業の、中国インドなどへの移転
    - ▶ 農業生産物の輸入
  - ▶ 社会・雇用構造への影響
    - ▶ 高卒の就業機会の減少
    - ▶ 大学にいかざるを得なくなっている
  - ▶ → 高等教育ユニバーサル化のプッシュ要因

# 日本の雇用構造の変化

- ▶ 高卒就職者数は急激に減少
- ▶ 大学に行かざるを得なくなっている





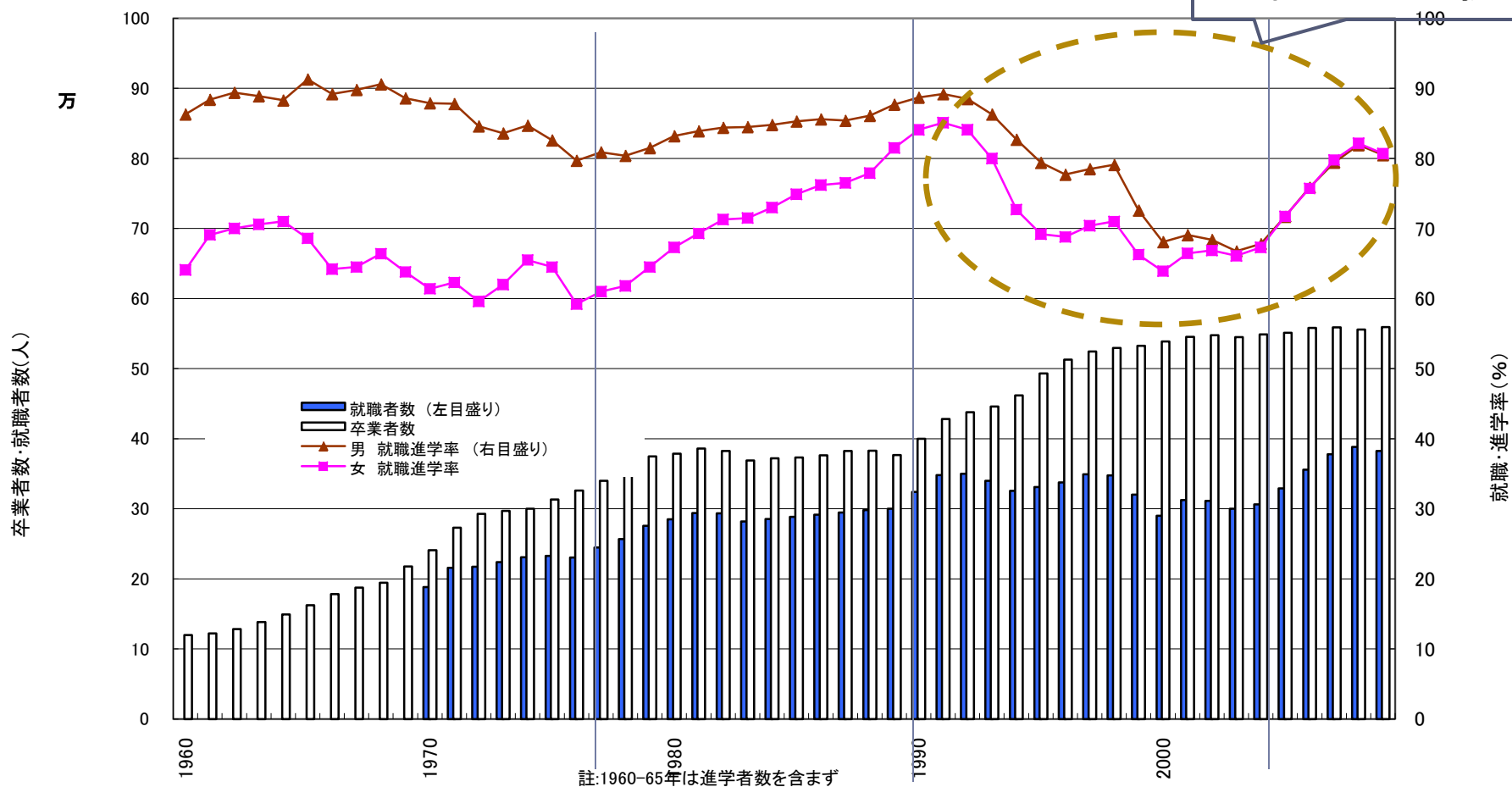
# 大卒低位雇用層の拡大

---

- ▶ 恒常的な就職難
  - ▶ バブル以降、大卒者55万人前後、就職者30万人台が続く
  - ▶ 3割程度が、卒業時に企業型就職をできていない
- ▶ 機会は開かれているが、就職できない
  - ▶ 機会は開かれている→長い就職活動→選抜されない
  - ▶ →自信喪失・就職活動から敗退
  - ▶ 「選択した」失業
- ▶ 就職しても、3年以内に3割程度が退職
  
- ▶ 大卒の低位雇用層が恒常的に発生

# 大卒就職進学率と卒業生・就職者数(1960-2009)

大卒無業率の拡大

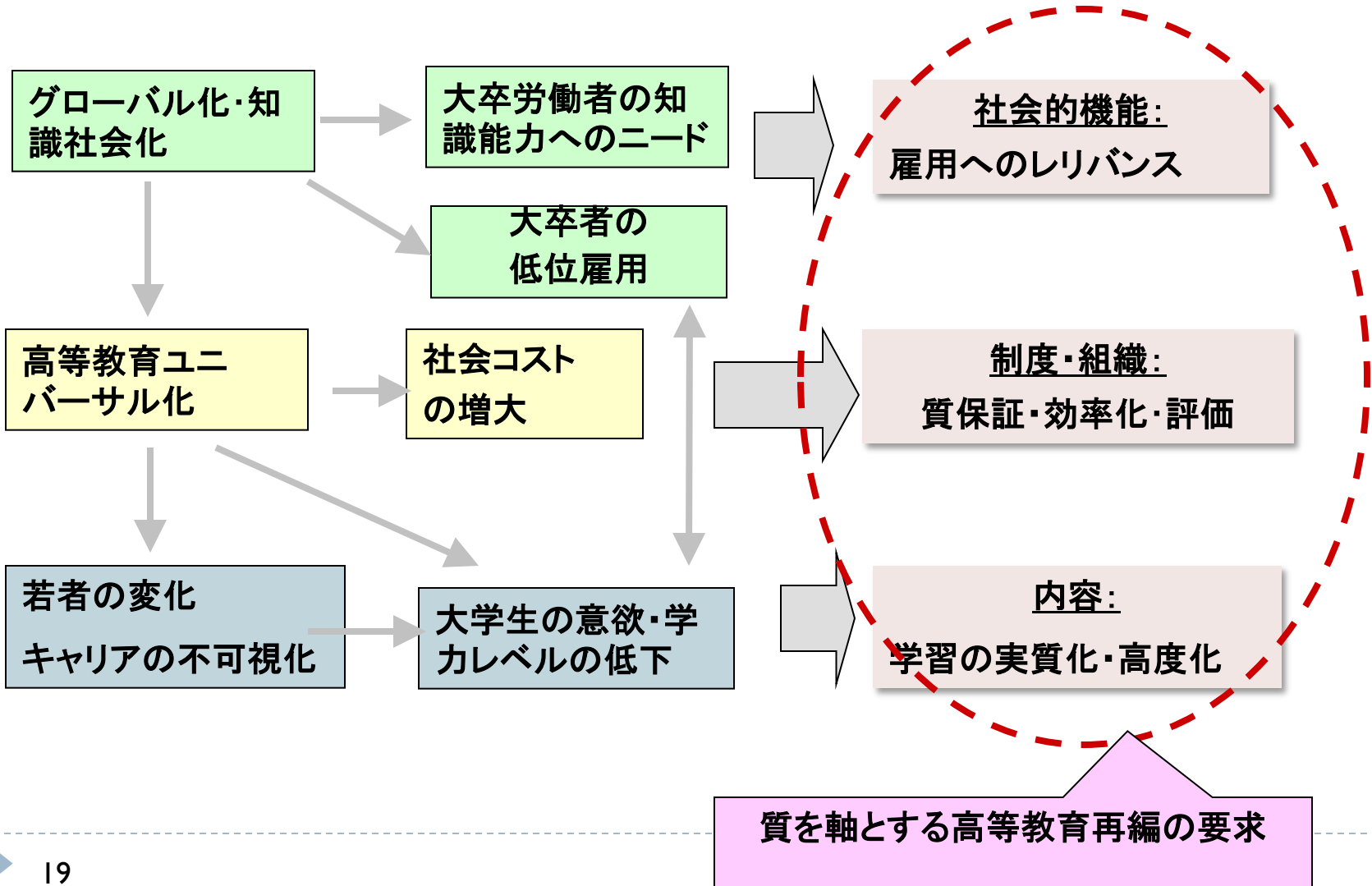


# 焦点としての大学の質

背景

問題点

高等教育への要求



# 質をめぐる焦点と論点

---

- ▶ 制度・政策・組織
  - ▶ 社会による直接の質の評価、統制の要求
    - ▶ 大学の自治・設置認可による間接統制自体が問い直される
  - ▶ 大学教育の適正規模
    - ▶ 量的制限論 vs. 「普通高等教育」
- ▶ 社会的機能
  - ▶ 職業教育・キャリア教育強化論が台頭
  - ▶ しかし他方で、実際には基礎コンピテンス、意欲が問題
- ▶ 教育内容
  - ▶ 大学で何を学習するか、どう学習するかが問題
  - ▶ 大学教育のペダゴジー
  - ▶ 改革のメカニズム



## 内 容

---

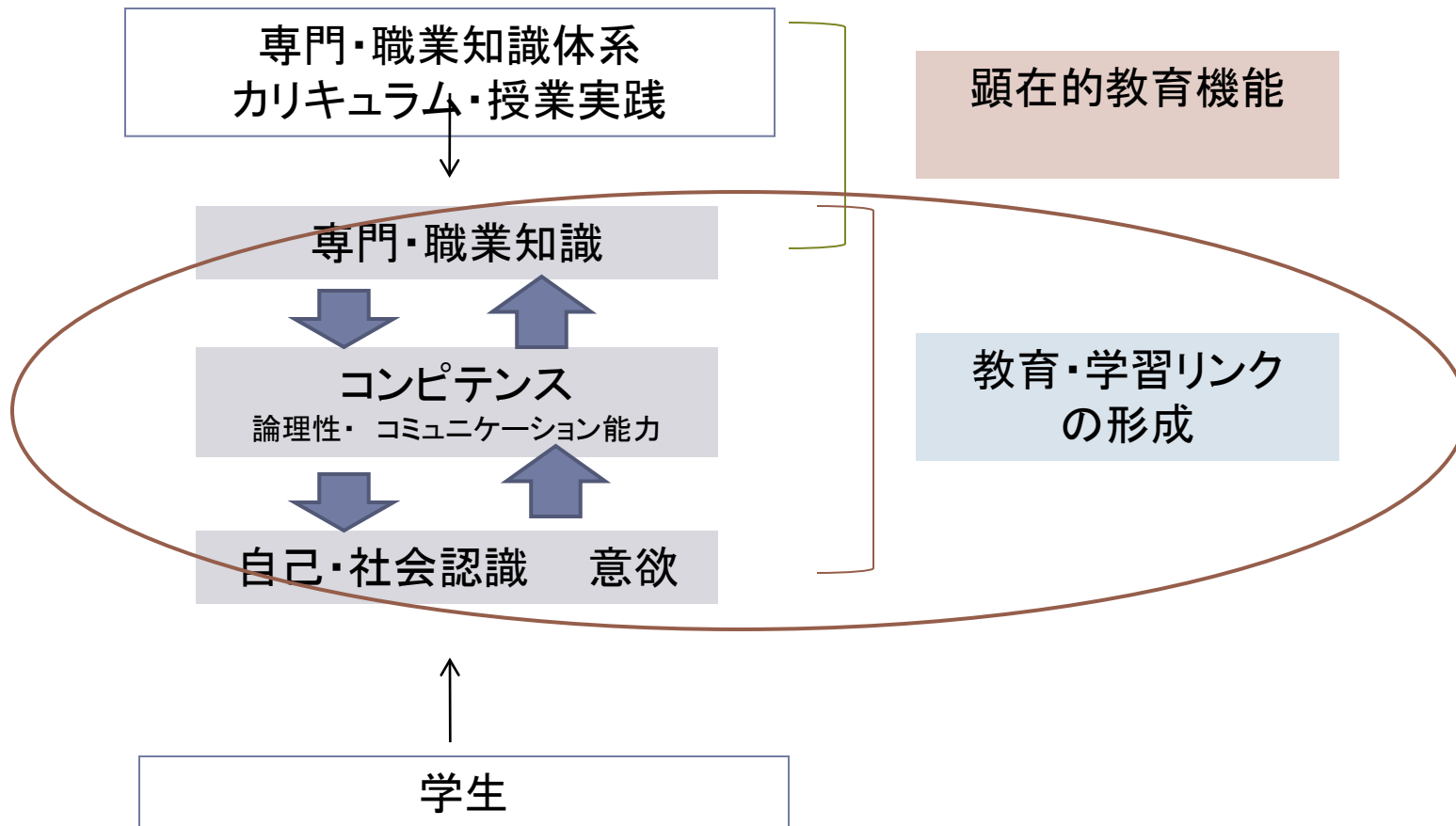
1. 高等教育研究のパラダイム

2. 現代的課題

▶ 3. 新しいパラダイムへ

# 大学教育のペダゴジー

## ▶ 教育・学習・成長をつなげる戦略



# 古典的大学の教育のペダゴジー

	職業教育	リベラル・アーツ	学術志向
目的	高度職業人	教養をもつ富裕層	研究者・官僚
知識	● 職業知識	● 古典	● 近代科学
動機	● 職業への意欲	● 階級的背景	● 知的意欲
教育・学習リンク	● 明確な修得目標 ● 試験	● 教師と学生の対話 ● 学習過程の統制	● 知的探求の追体験 ● 周辺の参加

潜在的な教育機能



- コンピテンスの形成
- 人格的成長

# 戦後大学教育モデル

---

- ▶ **内容： 多様な職業教育 + 一般教育**
  - ▶ 教員は学術志向へ これを量的拡大の中で達成する
  - ▶ 多様化⇒ 選択科目・単位制
    - ▶ 知識分野の拡大、学生の多様化に対応
  - ▶ 共通化⇒ 一般教育
    - ▶ 視野の狭窄化の補正、民主主義を支える教養
- ▶ **学習への導入メカニズム**
  - ▶ 伝統的ペダゴジーは弱体化
  - ▶ 補完したもの
    - ▶ アメリカ — 学習過程の統制。日本 — 試験、小集団
- ▶ **基本的な弱点**
  - ▶ 動機づけ
    - ▶ 企業への入職資格としての大学教育 動機づけが間接的
  - ▶ 一般教育
    - ▶ 動機づけ、学習への導入メカニズムの双方を欠く

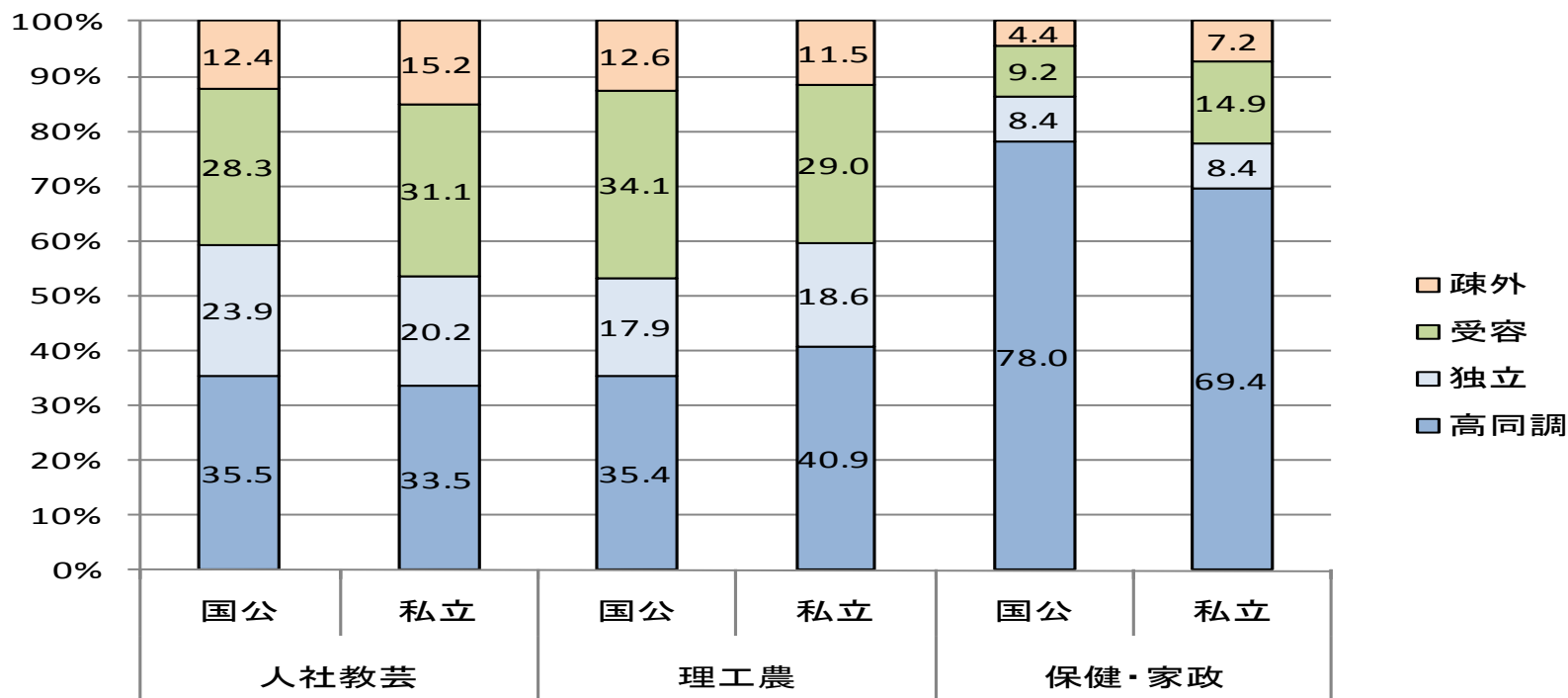


# 調査で何がわかったか

## ▶ 学術創成研究

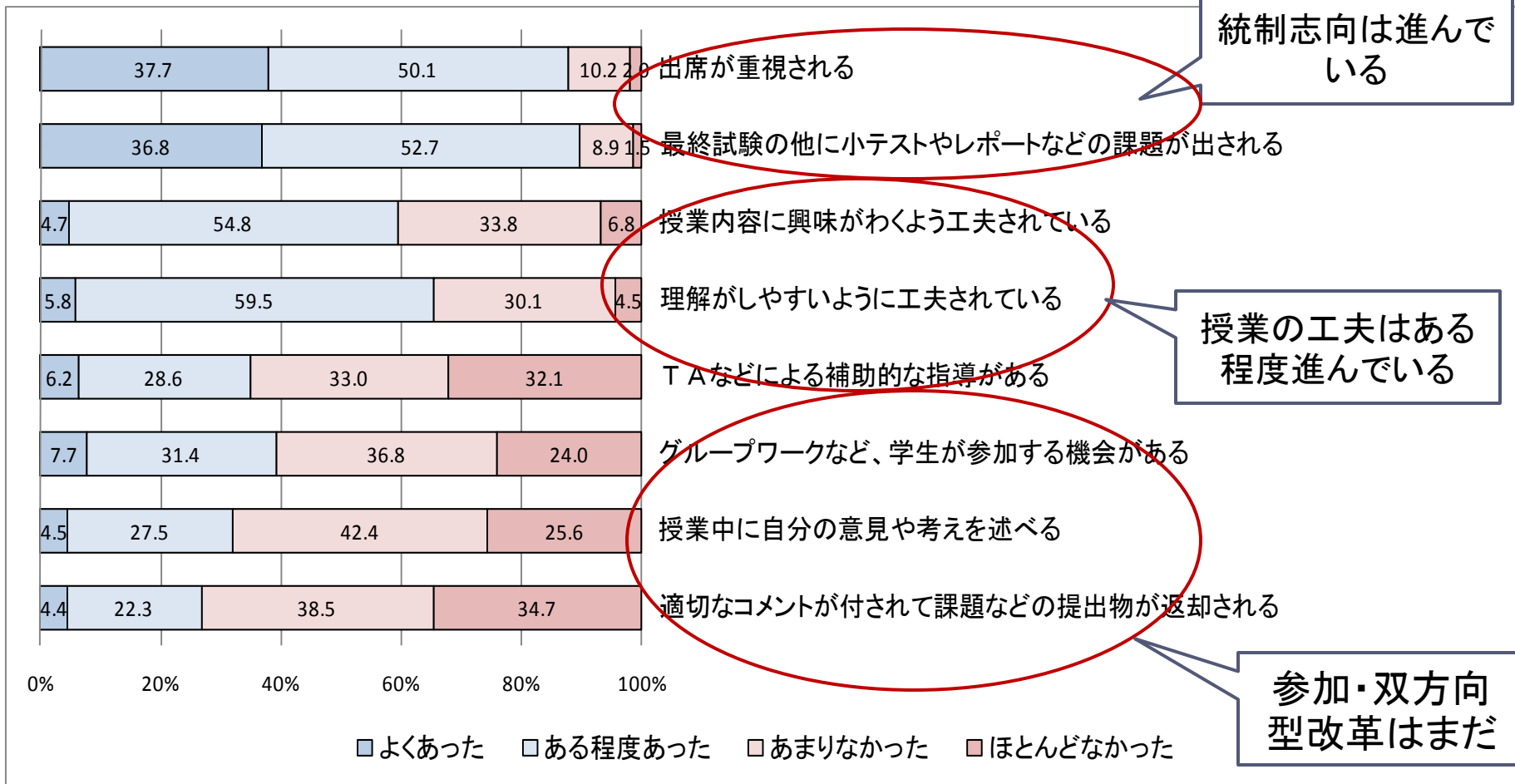
▶ 高校生追跡、大学生、職業人、事業所人事担当者調査

## ▶ 自己・社会認識、学習目的の低い学生が普通



データ: 東京大学 大学経営政策研究センター(CRUMP)  
『全国大学生調査』2006-8年、サンプル数44,905人  
<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

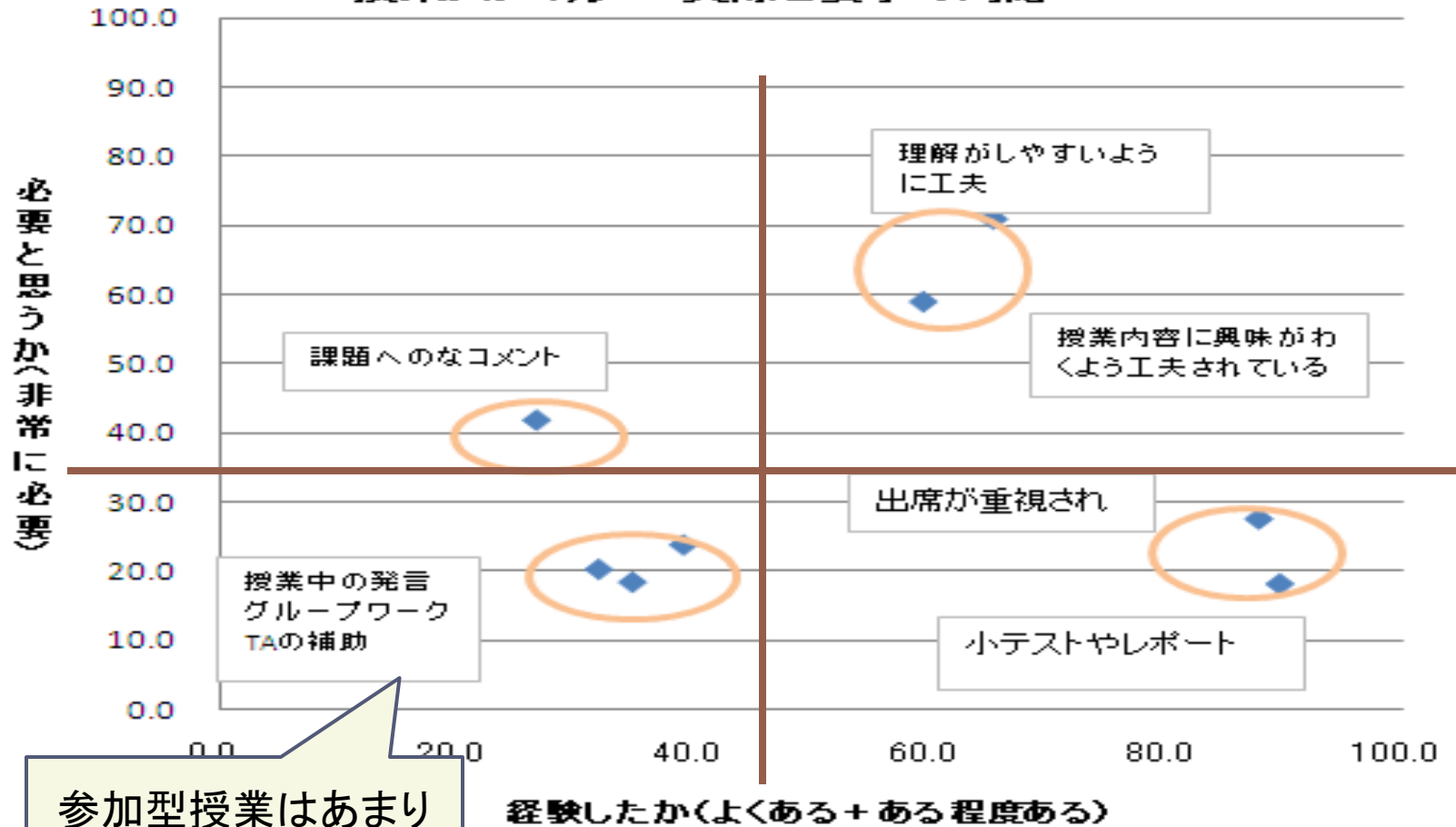
## ▶ 授業改革は限定的



出所：東京大学大学経営政策研究センター（CRUMP）『全国大学生調査』 回答者 44,905人

# 授業経験と期待

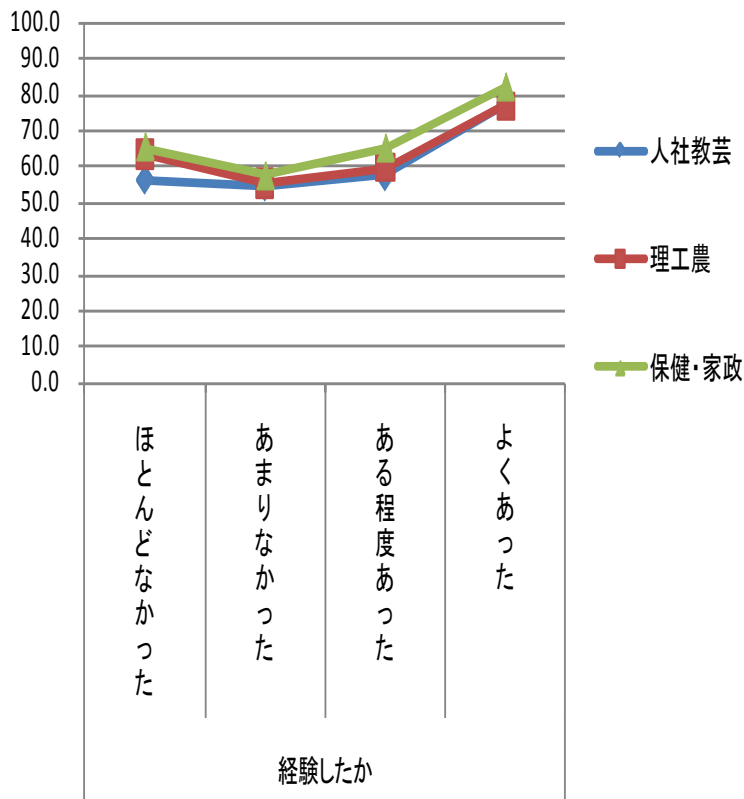
授業スタイル - 実際と要求の対応



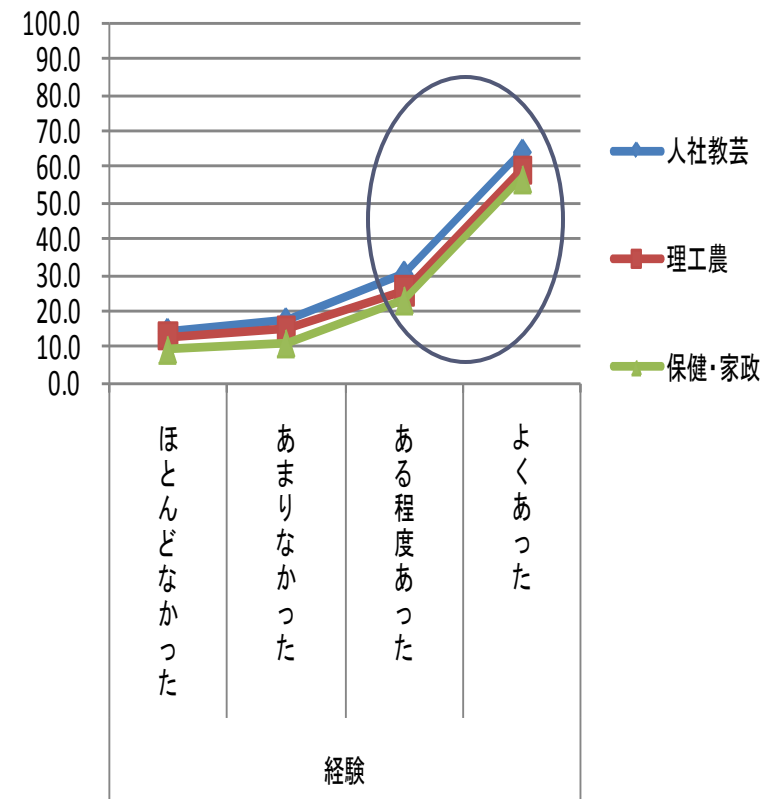
参加型授業はあまり期待していない

## ▶ 参加型授業は、経験しないと価値がわからない

興味をわかせる工夫 - 経験と「非常に必要」の割合



意見や考えを求められる - 経験と「非常に必要」の割合



# 新しいペダゴジーの構築

---

## ▶ 理論

- ▶ 青年期の学習・成長のメカニズム
  - ▶ 軸としての「経験」
- ▶ 専門・一般教育の枠の再検討
  - ▶ 専門・職業教育のパラドックス – 専門知識そのものは使われない
  - ▶ 一般教育のパラドックス
    - 職業教育、学術志向を補完する役割が期待される
    - しかし「広さ」そのものは、成長、コンピテンスをもたらさない

## ▶ 方法

- ▶ 大規模調査の有効性
  - ▶ 大学・専門分野による相違は大きい
  - ▶ 比較することが重要な視点を与える
- ▶ 新しい方法の開発

## ▶ 実践性

- ▶ 研究者のみでは進まない
- ▶ 各大学での分析と、その集積
- ▶ 大学教員、職員の参加

# ペダゴジーから組織・制度改革へ

---

- ▶ 「普通高等教育」をつくるもの
  - ▶ 単一の理念モデルはない
  - ▶ 経験的・多元的に形成される
- ▶ 重層的なフィードバック
  - ▶ 学生の学習過程を体系的にモニター
    - ▶ 授業にフィードバック
  - ▶ 大学間連携
    - ▶ 大学間の比較・ベンチマーキング
    - ▶ 各大学独自のモデルの形成
- ▶ これを支えるマクロのメカニズムが必要
  - ▶ 政策、大学経営の役割

# ペダゴジーと社会

---

## ▶ 戦後日本の経済発展

- ▶ 企業の拡大による成長
  - ▶ 企業に閉じ込められた技能形成
- ▶ それに対応した高等教育
  - ▶ 高等教育は職業的知識・コンピテンスから分離
- ▶ そうした体制の限界
  - ▶ 企業活動の限界 他方で大卒者の学習要求は高い

## ▶ 転換のジレンマ

- ▶ 新しい企業像がなければ、教育の目的を設定できない
- ▶ 人材がなければ、新しい企業活動を創造できない

## ▶ 糸口をどこにみつけるか

- ▶ 実践と経験、それを集約するメカニズム
- ▶ その軸としての高等教育研究パラダイムの役割

ご質問、ご意見をどうぞ

---

